

開催趣旨

「日本語教育スタンダードの構築をめざす国際ラウンドテーブル」

世界中の人々のさまざまな生活領域でグローバル化、ボーダレス化が益々進展するにつれて、外国語教育及び第二言語教育の重要性が増大し、いま北米や欧州では言語教育の新たな取り組みが見られる。

これらの政策策定のうえで特に重視されているのは、学習対象言語の「スタンダード」とその「評価基準」との包括的・有機的な連関である。アメリカの共通基準に基づく言語別「スタンダード」(1999年)や、欧州共通の「スタンダード」ともいえるべきCEFR(2001年)において、その典型を見ることができる。むろん、これらに先んじて国家的プロジェクトとして1988年からLOTEを導入したオーストラリアの取り組みは、今日の状況を見据えた画期的な試みであったといえよう。

そして、アジアでは、いま、経済連携協定交渉が各国間で進展し、アジア域内での人の移動は、今後ますます増加していくであろう。そうした状況下で重要となるのは、行動志向的なコミュニケーション能力に加え、多言語、多文化の中で、お互いの言語文化を理解し、他の言語文化に対して寛容な精神風土を醸成することである。いま世界中で235万人もの人々に日本語が学ばれていて(国際交流基金 2003年「海外日本語教育機関調査」)、日本に対する関心は今後益々高まることが予想される。また、経済成長著しい中国は、その国際展開の戦略として世界各地に100カ所もの中国語教育拠点の設置を計画しており、関係各国との協調を図っている。韓国語能力試験も、16カ国において年間2万人弱の受験者を対象に行なわれるようになってきた。そんな状況下、中国語、韓国語をはじめとするアジアの諸言語を視野に入れつつ、日本語の世界における「スタンダード」を構築していくことによって、アジア域内の多言語主義、多文化共生社会の実現に大きく寄与することを、国際交流基金は希望してやまない。

については、アメリカ、オーストラリア、韓国、中国、そしてヨーロッパから、この分野で優れて主導的な学者・専門家等を招聘し、2005年度に3回のラウンドテーブルを開催することとする。

1. 背景：世界の日本語教育の全体的傾向

・「学習者の若年化」

初中等教育課程の学習者が全体の6割強を占め、その割合は今後更に増すと予想される。初中等教育から高等教育へのスムーズでむだのない橋渡しが、米国でも欧州でも豪州でも中国でも韓国でも、現下の大きな課題となっている。

・「目的・目標の多様化」

上記のとおり、従前の高等教育における日本研究・日本学の枠組みでの取組みから初中等教育への大幅なシフト(学習者の若年化)によって、さまざまな個人的・日常的な関心による学習の動機付けと目標設定が顕著になっている。

・「達成・習熟度の具体化」

したがって、目標学習言語である日本語で「何ができるようになるか」、「何に役に立つか」という言語能力基準とそれに基づく標準シラバスの構築が望まれている。

2. 目的：日本語教育スタンダードの構築

- ① 言語能力を示す新しい基準の策定
- ② それにあわせた言語テストの模索
- ③ 上記2点を反映させた標準シラバス、標準教科書の開発

3. 実施形態：

上記の目的を念頭に、2005年度に3回のラウンドテーブルを開催し、今後の方針を策定するための課題設定を行なう。

<第1回> 2005年5月14日(土)～15日(日)

国際交流基金国際会議場

ラウンドテーブル

各国の外国語教育において、コミュニケーション能力を中心とするナショナルカリキュラム、ナショナルスタンダード策定に関する新しい考え方とその基準を反映させた能力測定試験導入の先行例を紹介し、そこから見えてくる日本語教育の言語能力基準、評価基準へ向けての課題設定を行ない、そのなかで外国人研究者からの注文・助言と、日本語教育関係者からの日本語に特化した場合の問題点の指摘を受ける。

第1部：世界各国におけるコミュニケーション能力を中心とするナショナルカリキュラム、ナショナルスタンダード策定に関する新しい理論

第2部：言語能力基準を反映させた言語テストの導入へー世界の言語テストをめぐって

第3部：日本語教育における新しい言語能力基準策定へ向けた課題設定